栃　原　高　原

—兵庫県主要植物採集案内(2)—

岩　谷　成　彦

位　置　朝来郡生野町栃原

播磨、但馬の国境線をなす山々、段ケ峯(ダルミネ)(1103.4メートル)の東南、通称ダルマミネ(912.7メートル)と呼ばれる山の中腹にある。

もとは、神崎郡長谷村に属し神崎郡の最北になつていたが、町村合併により朝来郡生野町となり朝来郡の最南端となつた栃原部落の北にあたる。

概　要　段ケ峯は地図に記載されているが、この912.7メートルのダルマミネの名は記入されていないため、段ケ峯と誤称されることがある。また、段ケ峯の前にあるので「前段」とも「小段ケ峯」とも呼ばれる。

この山の南の斜面中腹に丁度段をつくつたように存在するのが栃原高原である。

さらにこの高原は中央に入りこんだ谷及び尾根によつて東西2つに分れ、東の方を東段(ヒガシダル)、西の方を西段(ニシダル)と呼んでいる。

東段は栃原部落で飼つている牛の放牧場となつている。そのため毎年早春に山焼きを行つているので大木は殆んどなく山頂にかけて一面の草原となつているが処々水流もあり、湿地植物も多い。

西段は殆んど湿地からなる草原となつている。

中腹では処々鉄平石が露出して特殊な節理がみられる。明ばん原石や、ろう石も出るので、その搬出のため西段西端には栃原部落からドライブウエイが通じている。

その植物については別記のとおりであるが、蝶類その他の昆虫も多く、それらの採集地としても知られている。特に東段湿地で福田菊市氏はハツチヨウトンボを採集されている。

頂上よりの眺望もよく、草原は夏季にはキヤンプ場としてさかんに利用されている。

植物景観　栃原高原をふくむ山の植物景観をのべると山の南面と北面とでは全然景観が異なつている。

即ち、南斜面は前述の通り高原より山頂にかけて一面の草原で自由に登ることが出来るが、北斜面は一面ネマガリダケ等が密生して登ることは不可能である。その北斜面のうち、段ケ峯より発し北流する円山川の支流、田路川の谷ではハシリドコロやクモノスシダその他シダ類が多く見られる。(建部恵潤;兵庫県朝来郡田路クモノスシダ採集記・兵庫生物 Ⅲ-p.41)

南斜面は次の3つに分けられる。

(1) 山麓より高原まで　コナラ、クリ、ミズナラ、ヤマナラシ、ヤマハンノキ、フサザクラ、を主とした落葉雑木林の処が多くその中に、ネザサ、クロモジ、シデザクラ、マンサク、ウスギヨウラク、イチヤクソウ、タチツボスミレ、シハイスミレ、ケスミレ、チゴユリがみられ、処によつてはスギ、ヒノキの植林、モミの林もあり、その下にはヒメカンアオイがあり、水湿地ではオタカラコウ、ミズゴケの大群落がみられる。

栃原川に沿う岩壁には、アオネカヅラがみられ又、カテンソウ、ツルカノコソウ、エンレイソウ、ウラジロウツギ、オクノカンスゲ、ムカゴニンジン、ヤマブキ、タニギキヨウ等がある。

(2) 高原(東段、西段)

ゆるやかな斜面をなし、水流、湿地もあり変化に富んでいる。特に春は一面にワラビが生えワラビ狩りには楽しい場所となる。

オキナグサ、アカネスミレ、ヒゴスミレ、ホコバスミレ、オカスミレ、フモトスミレ、ヒメハギ、ミツバツチグリ、ヤブレガサ、キキヨウ、ツリガネニンジン、ママコナ、ハギ、シオガマギク、キクバヤマボクチ、ガンピ。

流れや湿地には、モウセンゴケ、エビネ、シヨウジヨウバカマ、ノギラン、ウメバチソウ、キセルアザミ、ヒメシロネ、ギボウシ、ミズチドリ、トキソウ、イヌノハナスゲ、オオイヌノハナヒゲ、ヤマアゼスゲ等のスゲ類等がみられる。

(3) 高原より頂上まで。

春にはワラビが多く、草の丈も低いので自由に登ることが出来るが、夏になると、ススキの背も高くなり歩行困難となる処も出来る。大木はない。

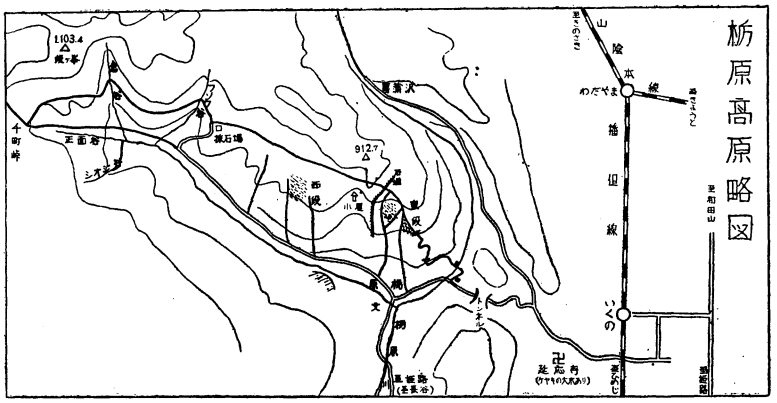
オミナエシ、キキヨウ、コオニユリ、ホクチアザミ、コウリンカ、フデリンドウ、オキナグサ、マツムシソウ。

・生野駅より高原迄の道とその植物。

駅のすぐ南にある踏切を西に進む。左手に生野義挙史跡「延応寺」があり、そのケヤキの少し奥にはオウレンが多い。川に沿つて登る。白花テンニンソウ。黒花ヒキオコシ、カワミドリ。やがて道は2つにわかれる。川に沿つて登れば菖蒲沢にゆくが途中マシカクイがある。この道とわかれ左の方へ橋を渡つて登ればトンネルがある。この前後にイヌガンソク、サトメシダがみられる。トンネルをぬけると道は下り坂となつて続くが、最初の農家の方へと右へ小径にはいる。川をわたり、田の中を進むと農家につきあたるが、その前の道を左の方へ進む

と小流があり、まもなく柵の処につく。これより登山道となる。

駅よりここまで所要時間は約40分。これより東段迄は約15分の登りである。附近には、コバノイシカグマやタニヘゴの群落、オタカラコウがみられる。



交　通

- 播但線生野駅より別記の道。
- 同長谷駅より市川に沿つてさかのぼり、途中より栃原川にそつてわかれ、栃原部落に入る（所要時間徒歩約1時間半）
- 栃原部落よりは前記のほか数本の登山道がある。
- 栃原を西へとおりすぎ西段西端まで鉱石運搬用のドライブウエイが通じている。

地　図

地理調査所発行

五万分の一生野、但馬竹田、大屋市場、山崎

参考文献

豊岡支部；段ケ峯植物採集記

兵庫県博物学会会誌14号（1937）

川中（福田）菊市；但馬植物目録（1～3）

〃　17号（1939）

〃　19号（1940）

〃　20号（1941）

西村公夫；段ケ峯山塊の昆虫類に就いて（1952）

〃　；雑誌ハイカー13号（山と渓谷社）

〃　；山と雪、各号（大阪；日本登山協会機関誌）

特に福田菊市氏（朝来町新井）の御教示に負う処多大であり附して感謝致します。

書　写　山

―兵庫県主要植物採集地案内(3)―

岩　谷　成　彦

位　置　姫路市書写

姫路城の西北方約6キロの処に位置し、夢前川（ユメサキ）とその支流菅生川にはさまれ、北は中国山脈につらなり、南は播磨平野をひかえた山塊である。東方の広峰、増位山らと共に播磨平野の北を区切る連山の一つとなつている。

概　要

最高点は白山と呼ばれ、海抜 362メートルであるが、山頂一帯は大体平坦地をなし、書写山円教寺の境内地となつている。この円教寺は、平安時代（康保3年、966年）に性空上人によつて開かれた天台宗の寺院で歴史も古く、伝説にとみ、重要文化財に指定された建物も多く、又西国27番札所として参詣者が多い。その便宜のため近年市営ロープウエイが設けられた。夏季には林間学校も開設される。

登山道と植物景観

登山道としては、南の正面からは、東坂道・西坂道・六角坂道、東方からは、置塩坂道、西方からは、刀出坂道・鯰尾坂道と本尊の観世音の手と同じく6本ある。ロープウエイが出来てからこれを利用する人が多く、6本の道を利用する人は少なくなり、道によつてはわかりにくくなつているものもある。

いづれの道を登つても気が付くこの山の植物相の特色としては、山麓から山頂近くまでと、山頂一帯との植物の景観が全然異なることである。

即ち、麓より山頂近くまでは大体陽樹におおわれているが、この山の基盤である石英粗面岩が露出する処多く表土も少ないために異状に乾燥し植物の生育上環境が悪い。その上、戦時中の乱伐と当時当地方を荒した松喰虫のため 600町歩といわれた全山の松は一応枯れてしまい、其後植林しているが非常に貧弱な植物相である。

ところが山頂一帯は、円教寺境内林として特に保護されてきたため、陰樹よりなる原生林がよく保存され、着生植物、羊歯植物も多く暖帯北部としての当地方特有の自然林の状態がよくうかがわれる。

このため、陽樹と陰樹の関係、植物と光、水分その他環境による影響がよく観察出来る山である。

・東坂道（所要時間約45分）

旧曽佐村東坂部落より登る道で姫路市に近く展望もよいため最も多く利用された道である。山麓より山門迄の道を18町にわけ1町毎に石碑が立つている。最近殆んどの人が利用するロープウエイの山上駅が、14町の処にあるため山門までは従来どおり利用されている。

砥石坂をはじめ基盤岩石の露出した処の多い道で、生えているアカマツも曲幹矮少のものが多く、これに砂防工事に植えられた木やツツジ科植物が混つている。

ハネミノイヌエンジユ、ニセアカシヤ、イタチハギ、モチツツジ、その他、ツツジ科の植物ネズミサシ、クリ、ヤマモモ、ネササ、ホソバノトオゲシバ。

このコース中珍らしいのはミズスギが山麓にみられることである。

・西坂道（所要時間約40分）

東坂のすぐ西にある西坂部落より尾根を登る道で、十妙院の前で東坂道と合う。東坂道と同じく18町に区分されている。

東坂道と同じくアカマツを主とする二次的森林で、それに混つて、コナラ、クヌギ、アベマキや、ナツハゼ、ヒサカキ、コバノミツバツツジ、アセビ等のツツジ科植物、ビロウドイチゴ、アキグミ、ケイヌビワ、ザイフリボク、ウシコロシその他が見られ、頂上近くになるとシイの稚樹が多くなる。

・六角坂道（所要時間約30分）

書写山の西南角より谷に沿つて登る道で、谷沿いの道のため植物は多い。菅生川沿いの六角部落より登り摩尼殿の下の湯屋橋の処に出る。

クサボケ、ヒメウヅ、ツチグリ、カスミザクラ、ツルグミ、ナツグミ、ナワシログミ、ハンカイソウ、カナビキソウ、マルバヤハズソウ、ムロウテンナンシヨウ、リンボク。

このコースでは、西播地方特産のコヤスノキやナツアサドリがみられる。これらは分布の東限界に近いものである。

・刀出坂道（所要時間約40分）

山の西側の刀出部落の県道沿いにある火の見やぐらの処より小川に沿つて登る道である。川に沿つて登る谷間の道で植林のスギ、ヒノキも多く植物の豊富なコースである。奥の院と金剛堂（重要文化財）の間の谷に出る。其処は書写山でも特にシダ類が豊富な処である。

アラカシ、ヤブツバキ、ナンテン、ビナンカツラ、シヤガ、イヌツゲ、コシダ、ウラジロ、ミズゴケ、シイ、アオキ、ヤブデマリ、ゴマギ、ニガキ、フユイチゴ、ミカエリソウ、イヅセンリヨウ、ツルリンドウ、ジウモンジシダ、イノデ類、キジノオ、イワヒメツラビ、クマワラビ、ヒメワラビ、アイアスカイノデ。

・鯰尾坂道（所要時間約1時間）

山の背後を西より登る道で尾根をたどる。ツツジ科植物の多い地味の瘠悪を思わせる道でアカマツを主とする二次的森林のコースであるが、表側に比べ植物の発育は割合よい。6本の道のうち最も長い道で、菅生川沿いの鯰尾又は新在家部落より入り奥の院の後に出る。途中行者堂があるので行者道とも云つている。

表側では少ないミヤコツツジが多くみられる。シヨウジヨウバカマ、クヌギ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミ、コツクバネウツギ、アズキナシ、ナギザサ、ツタウルシ、ヤマトテンナンシヨウ、ミヤマシキミ、アクシバ。

・置塩坂道（オーシオ坂道とも云う）（所要時間約30分）

山の東側夢前川沿いの書写吹部落の中央より寺務所の裏に出る道である。尾根を利用する道で、岩が多く露出して乾燥した道である。植林のマツが多く、コナラ等の落葉樹や、ヒノキ、カシ、ソヨゴ、ヤマモモの常緑樹もまじる。その下に、ネササ、ウラジロ、コシダ、ヤシヤブシ、ネズミサシ、シヤシヤンボのツツジ科植物も多くみられる。

・頂上境内林

他の道ではあまりはつきりしないが、東坂道では山門を入ると、それまでの明るい景観が一変して昼なお暗いという言葉がそのままあてはまるような原生林となる。

植林したスギ、ヒノキの大木をはじめ、アカマツ、モミ、ツガの針葉巨樹、アカガシ、シラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、アラカシ、スダシイ、ダンコオバイ、イヌガシ、ヤマコオバシ、ヤブツバキの常緑樹が茂る暖帯自然林である。これにヨウラクラン、カヤラン、ムギラン、ノキシノブ、ヒメノキシノブ、コケ類が着生している。その下にヤブコオジ、ホソバジユズネノキやシダ類の下草が多い。特にシダ類は多く、県下で普通のもの約60種位は労せずして採集出来ると稲田又男氏は述べておられる。頂上に多くみられるナギザサは分布の南限界のものである。

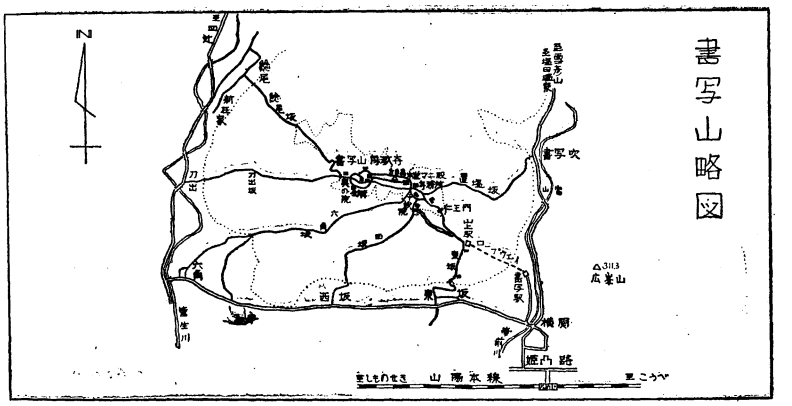
頂上巡回コースとしては山門—十妙院（西坂道と合す）—権現坂—湯屋橋（六角坂道と合す）—摩尼殿

ヒトツバ、マルバベニシダ、イヌワラビ、マメヅタ、オオモミジ、ナガバアラカシ。

—大講堂・常行堂—金剛堂—（刀出・鯰尾両坂道と合す）—奥の院

大講堂の近くにある大杉は周囲約8メートル半・樹令約600年のものといわれる。オカメササ、ホソバイヌワラビ、ヤワラシダ、コオヤコケシノブ、アイノコクマワ

ラビ、シケチシダ、ベニシダ、ウチワゴケ、坂道と合す谷のあたりシダ類が特に多い。
—食堂—仙岳院—頂上（白山）—摩尼殿
チリツバキ(栽)、ウシカバ、マンリヨウ、ギンリヨウウソウ、キツコウハグマ、ツルアリドオシ、ヤダケ。途中より如意滝に行く道がある。
—寺務所（置塩坂道と合す）
—十妙院—山門。



ツクバネ、クマザサ、コオヤボウキ、ウラジロ、コシダ。

交　通

- 市営バス　姫路駅前よりロープウエイ書写駅行が出てロープウエイと連絡している。
  片道25円、ロープウエイ往復90円、連絡切符を買えば往復125円。麓迄所要時間約20分。
- 神姫バス　姫路駅前より四辻経由山崎行にのれば、東坂、西坂、六角、刀出、新在家と南、西側よりの登山口の登り口前に停車。
  東坂迄25円約20分、新在家迄35円約30分。

同じく山之内、前之庄行にのれば置塩坂道の書写吹にとまる。30円約20分。
以上のいづれでも横関でおりればロープウエイ書写駅に近い。15円約15分

宿泊設備

円教寺（ユースホステル）電話2700番

地　図

地理調査所発行・5万分の1　竜野
2万5千分の1　姫路北部

参　考　文　献

陸井初治：播州書写山植物考　植物趣味 I—1 (1932)
加藤弥栄：世界的珍樹コヤスノキ、ナツアサドリを書写山に採る　みやま IX—12 (1937)
西本俊雄：書写山植物目録　兵庫県博物学会会誌5号 (1933)
〃　〃：県下の珍植物ナツアサドリを発見して　〃　〃　〃
稲田又男：兵庫県羊歯植物誌　日本シダの会関西談話会 (1958)
〃　〃：播磨書写山植物目録予報　(1954)
兵庫県生物学会：兵庫の自然　のじぎく文庫 (1960)
室井綽・岡村はた：兵庫県植物分布概観　兵庫生物 IV—1 (1960)
兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第16輯　(1942)

神戸市のニラミアマダイ

ニラミアマダイ *Merogymnus iyonis* JORDAN et THOMPSON は1913年愛媛県八幡浜より記載されて以来記録がなかったらしいが、最近、片山正夫・藤岡豊両氏（1958）によって山口県大島郡沖家室沖（伊予灘）から1頭が記録された。

1959年秋に神戸市東垂水でベラつりを数名で行ったところ、キュウセン・クラカケギス・トビヌメリ等にまじって本種の1頭（全長86mm）がつり上げられた。

面白いことにつり上げると口をいっぱいにひろげるので、口角（主上顎骨内面）にある黒斑が非常にはっきりと認められる。

このような性質のためか、漁師にきくとオオグキという名がついている由。このことからもこのあたりに稀れでないことが分る。

1959年9月14日
神戸市垂水区東垂水・平磯燈台付近（大阪湾）
辻本　修氏採集

なお標本は大阪市立自然科学博物館に保管されている。

（柴田　保彦）